

開館45周年記念

鉄斎と帝室技芸員の作家たち

前期 2020年4月5日(日)～5月10日(日)

後期 2020年5月17日(日)～6月21日(日)

会場 鉄斎美術館別館「史料館」

開館時間 9時30分～16時30分

休館日 水曜日・展示替期間



12 羅漢図



20 高遊外詩画染付菓子鉢



9 蝸牛廬図

帝室技芸員は、明治23年(1890)に設置された帝室(皇室)による美術工芸家の保護と制作を奨励する顕彰制度で、昭和22年(1947)に廃止されるまで美術界では最高の荣誉と權威を示すものであった。任命された作家の分野は多岐にわたり、日本画家、洋画家、彫刻家、製陶家、金工・漆工・刀工・染織といった美術工芸家に加えて、建築家、写真家なども選出された。

帝室技芸員の作家たち 富岡鉄斎(1836～1924)の名が京都美術界に現れるのは、明治19年、数え51歳の時である。幸野樸嶺主催の京都青年絵画研究会が結成され、展覧会の開催に伴い谷如意とともに学士審査員を務めた。鉄斎は文人が画を描くのは、自ら清娛して性情を淘汰する遊戯であるとの考えから、団体には日本南画協会と後素如雲社にのみ参加して作品を出品していた。ほかの展覧会には審査員として参加することはあっても、自作を公募展に出品することは一切なかった。また明治27年からは10年間にわたって、京都市美術学校(現京都市立芸術大学)の嘱託教授として教壇に立ったが、担任したのは修身であった。儒者を任じた鉄斎は画壇との交わりにおいては学者として臨み、画家たちも鉄斎を同業者ではなく学識者として敬意を払っていた。

帝室技芸員に任命された作家たちは、言うまでもなく画壇の重鎮および人気作家であったが、鉄斎は流派や立場に拘わらず、さまざまな美術工芸家と交流して、時に創作活動をともした。明治23年に帝室技芸員に任命された日本画家の森寛斎(1814～94)とは知己の間柄で、交流の一端は門人・山元春挙が「鉄斎翁の人格と芸術」(『大毎美術』第29号、1925年)に述べるところである。27年に寛斎が死去した際には霊山官祭招魂社の葬儀に赴き、のち七年祭、十七年祭にも詩を賦し奉奠して(Na.4)、変わらぬ敬愛の念を示している。また田崎草雲(1815～98)とは維新以来の付き合いで、鉄斎が草雲の足利の山房(Na.6)を訪ねた時の様子は、小室翠雲の「鉄斎の来訪」(『田崎草雲先生の生涯』、日本南画院、1930年)に詳しい。

近代京都画壇の父と称される幸野樸嶺(1844～95)とも鉄斎は昵懇の仲であった。樸嶺がシカゴ万国博覧会(1893年)に《秋日田家図》(東京国立博物館蔵)を出品するにあたっては画題選択の相談にのり、同26年に帝室技芸員に任命された時には、鉄斎も祝宴に出席してその荣誉を祝っている。鉄斎が画を描き、鷺夢居士こと樸嶺が一首を寄せる「安宅閑図」(No.2)、鉄斎が自ら刻して樸嶺に贈った朱文楕円印「豊」(樸嶺の名「直豊」)が捺される「華山可進騷擾之図」(《迂癖画談》のうち、No.5)などからは、互いの信頼の情が窺える。そのほか岸竹堂の依頼で描かれた《群仙翫瓢図》(No.1)、七宝家・並河靖之と鉄斎の合作になる《魁星図賛斗式筆洗》(No.16)といった作品は、交流を物語する証である。さらには、橋本雅邦、野口幽谷、望月玉泉、荒木寛畝、川端玉章、今尾景年、野口小蘗、竹内栖鳳、伊東陶山、上村松園ら帝室技芸員の作家たちともそれぞれにエピソードがあるが、紙面の都合上、別稿に譲る。

「帝室芸員」の意義 大正6年(1917)6月11日、鉄斎は帝室技芸員に任命される。これは、82歳の老儒には思いがけない出来事であった。招集に従って同13日に京都帝室博物館に出頭し、館長の久保田鼎より帝室技芸員任命の辞令書を受けとった。帝室から賜った最高の荣誉を、勤皇家の鉄斎は恭しく拝命したものの、室町一条の自邸に戻ると卒然として「蝙蝠が門違ひに入来祝ひの客は市をなすかな」の一首を詠んだ。「少壮より儒学第一」としてきた鉄斎にとって、「技芸」を以っての選任は全くのお門違いであり、福を意味する蝙蝠が舞い込んできたとの比喻に困惑ぶりが窺える。

幸野樸嶺、今尾景年といった親交のあった画家たちは、拝命の記念に「帝室技芸員」印を制作して荣誉



24 朱文方印「帝室芸員」
(桑名鉄城刻)

の証としていた。鉄斎も例に漏れず記念の印を制作したが、その印文は「帝室技芸員」の「技」を外した「帝室芸員」(No.24)であった。用例は《蘇東坡像》(No.8)、《大国大神神影》(No.10)ほかに見られる。生涯儒者を任じ、画工とみなされることを嫌った鉄斎は、自身が「技芸」をもって顕彰されたことが腑に落ちず、「帝室芸員」と称することで機智に富んだ意義付けをしたのである。「帝室芸員」の「芸員」とは、「遊芸(芸に遊ぶ)の官員」すなわち《論語》述而に「子曰く、道に志し、徳に拠り、仁に依り、芸に遊ぶ」とあるのに基づき、「学問や技芸を修める官員」の意である。

翌7年1月、京都嵐山・車折神社に社名碑が建てられた。明治21年から26年まで宮司を務めた関係により碑文の揮毫を依頼された鉄斎は、落款に「帝室芸員 富岡百鍊書」と自署した。永続的な石碑に、後世ともすれば脱字との誤解を招きかねない文字を刻んだことに、確固たる信念が窺える。また、大正10年5月15日に高野山霊宝館が開館し、鉄斎は高野山管長・土宜法龍の依頼で揮毫した「放光閣」大額を寄進する。これには「帝室宜芸員」と自署し、「技」を同音の「宜」に書き換えている。その意は「学芸にたずさわるにふさわしい官員」と解せられ、あくまでも自身は「技芸員」でないとの気概が見てとれる。任命から数年を経た大正9年頃には、鉄斎は自身の落款に「帝室技芸員」を用いるようになっていたが、記念碑的な作品に自署するには未だ躊躇があったと考えられる。なお、帝室技芸員は自作を宮内省に献上する義務があったが、鉄斎は何度打診されても応じなかったという。そぐわない榮譽に対してのせめてもの抵抗だったのかもしれない。

初代諏訪蘇山との交友 大正6年、鉄斎とともに帝室技芸員に任命されたのは、日本画家の寺崎広業、小堀軯音、川合玉堂、下村観山、山元春挙、彫刻家の新海竹太郎、製陶家の伊東陶山、諏訪蘇山、鍛金家の平田宗幸、建築家の佐々木岩次郎であった。このうち初代諏訪蘇山(1851～1922)は、鉄斎晩年の芸術上の得難き友となった。蘇山は金沢に生まれ九谷で製陶に携わり、のち京都に出て、明治40年に五条坂に窯を構えて独立した。青磁を得意とし、「蘇山青磁」と呼ばれる優れた作品を多く制作した。鉄斎との交友は帝室技芸員拝命時にはじまり、蘇山が大正11年2月に没するまでの約4年半に及んだ。鉄斎は、建仁寺で執り行われた蘇山の葬儀に高齢をおして参列し、友人代表として弔辞を読んだ。祭壇には鉄斎筆の「蓮図」一幅が掛けられたことが、「初代諏訪蘇山葬儀記録写真集」(No.29)より知られる。共箱に「諏訪蘇山翁の薦事の為に之れを画く」とある《羅漢図》(No.12)は、一周忌供養のための袱紗の下図として制作されたもので、羅漢の顔は蘇山に似せられていると伝わる。



29 初代諏訪蘇山葬儀記録写真集のうち

《蝸牛廬図》(No.9)、《帝者師太公望 釣魚図》(No.11)といった鉄斎が蘇山のために描き贈った作品、書簡(No.14)からは両者の交情の深さを読み解くことができるが、とりわけ合作には創作活動を共有した喜びが表されている。鉄斎自刻になる白文方印「鉄斎」(No.25)、朱文囊形印「括囊無咎」(No.26)、白文方印「無事小神僊」(No.27)は、印癖を誇る鉄斎のために蘇山が造った磁印である。鉄斎がこれの返礼とした《布袋和尚図》(『鉄斎研究』第19号-19)には、印影とともに「此の磁印を造りし者は蘇山翁、これを鑄りし者は鉄斎外史」と識されている。また《魁星閣図絵具皿》(No.18)、《魁星図賛絵具皿》(No.19)、《高遊外詩画染付菓子鉢》(No.20)には、画賛の典拠などについて丹念に墨書された鉄斎の共箱が備わるが、興味深いのは蘇山には「帝室技芸員蘇山翁の造る所」と記するのに対して、自身の落款には称号を用いないことである。敬愛する名匠との合作を楽しみながらも、あくまでも立場は異なることを表明しているのであろう。

大正13年12月31日、鉄斎は数え89歳で死去する。漢学者の長尾雨山が揮毫した《富岡鉄斎墓誌銘》(No.15)の小篆の題額には「故帝室技芸員帝国美術院会員従四位富岡鉄斎先生墓誌」と、その功績が讃えられている。こうした称号は晩年の鉄斎に栄光をもたらし、今日なお「近代文人画の巨匠」と謳われる拠り所となっていることは明らかである。(柏木知子)

【主要参考文献】

野中浩俊「鉄斎の書美(17)～(19)－諏訪蘇山宛書翰(1)～(3)」(『書叢』第17～19号、新潟大学書道研究会、2003～05年)、高階絵里加「幸野煤嶺『秋日田家図』について－歴史画としての風景－」(『近代日本の歴史都市－古都と城下町－』思文閣出版、2013年)、塩谷純「日本近代美術に見る御用と榮譽－帝室技芸員制度とその周辺」(『天皇の美術史6 近代皇室イメージの創出 明治・大正時代』吉川弘文館、2017年)、柏木知子「京都画壇と鉄斎－富岡鉄斎旧蔵資料を中心に－」(鉄斎美術館・塚本市立中央図書館聖光文庫、2019年)、柏木知子「富岡鉄斎の帝室技芸員拝命について」(『書道文化』第16号、四国大学書道文化学会、2020年)。

《出品目録》

[書 画]

番号	名 称	筆 者	制作年	寸 法(縦×横)cm	員数	材質・技法
1	群仙瓊瓖図	富岡鉄斎筆	明治24年(1891)	40.0×131.6	1面	絹本着色
2	安宅閑図	富岡鉄斎・幸野樸嶺筆	明治中期	135.9×61.7	1幅	紙本着色
3	諸家蔬菓図	富岡鉄斎・竹内栖鳳・菊池芳文ほか筆	明治32年(1899)	17.8×46.8	1本(両面のうち)	紙本着色
4	森寛斎十七年祭賦書	富岡鉄斎筆	明治43年(1910)	136.2×33.9	1幅	紙本墨書
5	迂癖画談	富岡鉄斎・幸野樸嶺筆	明治～大正	各24.5×38.8	2帖のうち	絹本着色・紙本墨書ほか
6	田崎草雲山房図	富岡鉄斎・小室翠雲筆	明治～大正	27.4×324.4	1巻	紙本墨画・墨書
7	溪山競秀図	富岡鉄斎・野口小蘗・小室翠雲ほか筆	大正5年(1916)	各29.6×21.5	1帖	絹本墨書・着色
8	蘇東坡像	富岡鉄斎筆	大正7年(1918)	100.5×32.0	1幅	紙本淡彩
9	蝸牛廬図	富岡鉄斎筆	大正9年(1920)	124.8×32.0	1幅	紙本淡彩
10	大國大神神影	富岡鉄斎筆	大正9年(1920)	127.6×43.7	1幅	紺紙金泥
11	帝者師太公望釣魚図	富岡鉄斎筆	大正10年(1921)	141.5×38.6	1幅	紙本淡彩
12	羅漢図	富岡鉄斎筆	大正11年(1922)	71.1×66.8	1面	絹本着色
13	水郷清趣図	富岡鉄斎筆	大正12年(1923)	130.7×31.0	1幅	紙本淡彩
14	諏訪蘇山宛富岡鉄斎書簡	富岡鉄斎筆	大正時代	24.0×46.0	1巻	紙本墨書
15	富岡鉄斎墓誌銘	長尾雨山筆	大正14年(1925)	33.7×49.6 33.6×49.6	1幅	紙本墨書

[器物ほか]

番号	名 称	作者ほか	制作年	寸 法(縦×横×高)cm	員数	備 考
16	魁星図賛斗式筆洗	並河靖之作・富岡鉄斎原書	明治33年(1900)	25.0×25.0×18.0	1口	箱書：富岡鉄斎
17	富士山形香炉	初代諏訪蘇山作・富岡鉄斎筆	大正9年(1920)頃	18.5×35.0×24.0	1基	
18	魁星閣図絵具皿	初代諏訪蘇山作・富岡鉄斎筆	大正10年(1921)	15.5×15.5×23.0	1組	木器：中島菊斎
19	魁星図賛絵具皿	初代諏訪蘇山作・富岡鉄斎筆	大正10年(1921)	15.5×15.5×19.0	1組	箱書：富岡鉄斎
20	高遊外詩画染付菓子鉢	初代諏訪蘇山作・富岡鉄斎筆	大正10年(1921)	18.4×18.4×8.8	1口	箱書：初代諏訪蘇山、富岡鉄斎
21	青磁筆洗	初代諏訪蘇山作	大正10年(1921)	16.7×24.7×13.6	1口	箱書：富岡鉄斎
22	白泥湯罐	初代諏訪蘇山作・富岡鉄斎筆	大正11年(1922)	11.6×13.2×13.5	1口	箱書：富岡鉄斎
23	磁硯 銘撥雲	初代諏訪蘇山作	大正時代	16.9×12.1×4.0	1面	漆蓋書：富岡鉄斎
24	朱文方印「帝室芸員」	桑名鉄城刻	大正6年(1917)頃	3.0×3.0×6.5	1顆	
25	白文方印「鉄斎」	初代諏訪蘇山作・富岡鉄斎刻	大正9年(1920)	2.6×2.5×6.4	1顆	
26	朱文囊形印「括囊無咎」	初代諏訪蘇山作・富岡鉄斎刻	大正10年(1921)	11.5×8.2×13.6	1顆	箱書：富岡鉄斎
27	白文方印「無事小神僊」	初代諏訪蘇山作・富岡鉄斎刻	大正10年(1921)	8.2×8.4×15.9	1顆	箱書：富岡鉄斎

[富岡鉄斎旧蔵本]

番号	名 称	著者ほか	制作年	寸 法(縦×横)cm	員数	備 考
28	晴蝸廬印譜	加藤紫山題字・富岡鉄斎序	明治30年(1897)	19.6×12.4	1冊	幸野樸嶺印譜
29	初代諏訪蘇山葬儀記録写真集		大正11年(1922)	19.2×25.6	1帖	

・次回展覧会

開館45周年記念「鉄斎の祭礼図」

前期：2020年6月28日(日)～8月2日(日)

後期：2020年8月23日(日)～10月4日(日)

会場：鉄斎美術館別館「史料館」

清荒神清澄寺 鉄斎美術館

〒665-0837 兵庫県東条市米谷字清シ1番地 Tel.0797-84-9600 Fax.0797-84-6699 <http://www.kiyoshikojin.or.jp>

令和2年4月1日 印施